

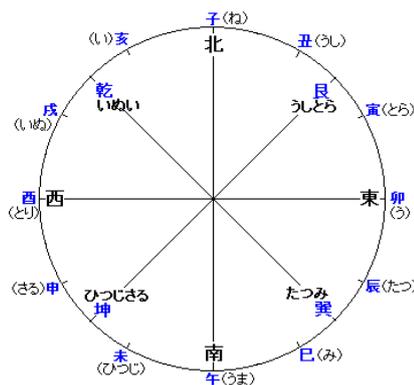
東陽町の街角から眺めた三百年

<1> 洲崎から東陽町への道 その1

江戸時代初期に江戸城への水路の確保策として小名木川などの掘削や浚渫が行われ、河口付近の湿地帯に浚渫土を入れて埋立地を造成した。

洲崎(すさき)は元禄年間(1688年~1704年)に埋め立てられ、海に突き出した出島のような土地は「洲崎十萬坪」と言われる景勝地だった。

明治20年(1887年)現在の文京区富坂に東京帝国大学を新設することになり、根津の遊廓が隣接するのは望ましくないので「遊廓移転」が決まった。「吉原へ移転」という案もあったが、満杯のため洲崎がその移転先となった。洲崎弁天東側の湿地を整備して洲崎弁天町と名付け、明治21年(1888年)に根津から遊廓が移転して開業した。



この頃、吉原を「北国(ほっこく)」洲崎を「辰巳」と言った。日本橋から見ると南東の方角にあたることから「辰巳(巽)」という隠語ができた。(左図：十二支による方角の表現)

徳川幕府の政策による埋め立て事業でできた洲崎は、かような流れを経て、明治の御代には遊廓となった。明治26年及び明治45年に大火がありはしたが、大正時代には約300軒の遊廓がひしめき、吉原と並ぶ大歓楽地になったと言われている。

そして第二次大戦のさなか、昭和18年に洲崎遊廓は閉鎖されて軍需工場の宿舎などに使われたが、昭和20年の東京大空襲で焼け野原と化した。しかし、終戦のわずか半年後には、大門通りの東半分を整備して「洲崎パラダイス」と名付けた歓楽街(いわゆる赤線地帯)ができたというから驚く。

そして、昭和33年3月に売春防止法が施行されたことで消滅という足取りになっている。

私が東京の住人になった昭和31年頃、高田馬場駅から出る都電15番の終点は洲崎だった。洲崎がどんな所かは知らなかったし興味も感じなかったが、洲崎弁天町という「きれいな名の町」があることは知っていた。

それから数年後、高校時代に南砂町に住む級友の家を訪ねたのがこの地に足を入れる初めての機会になった。飯田橋で乗った都電が永代橋を渡ると見慣れない景色になり、門前仲町を過ぎると潮の香りもするし、他所の国へ来たような感じさえたのを憶えている。

昭和42年になり、洲崎弁天町は東陽一丁目という名に変わり、大門の入口だった洲崎交差点は東陽三丁目となった。それから何年後かに永代通りの地中には地下鉄東西線が走り、洲崎の東側にあった東陽公園前交差点には東陽町という駅ができた。

<2> 洲崎から東陽町への道 その2

令和の時代となり、洲崎の埋立からは三百数十年、洲崎遊廓の誕生からは130年余りの時が経った。

「洲崎十萬坪」の地はどんな風に変容したのかを確かめてみたくなって、3月末の寒い午後、東陽町交差点を出発した。

永代通りを西へ向かうとわずかで東陽三丁目交差点になる。交差している道は北に向かえば扇橋・住吉を経て錦糸町駅の西を通り東京スカイツリーを経て、言問橋を渡ると吉原の大門につながっている。交差点を左に曲がり、南に向かうと道路は小山のような膨らみを越える。高い堤防を構える水路を跨ぐ洲崎橋があった所だが、現在は埋め立てられて洲崎川緑道公園となっている。江戸時代の洲崎埋め立てが行われる前はここが海岸線だった。一直線に南に向かう道は、幅30~40mあり、中央分離帯が

ある大通りで、遊廓の入口には洲崎大門があった。また北進して言問橋に向かう道は、二つの大門を結ぶ「大門通り（おおもんどおり）」とも言われていたらしい。

大門の東側の脚があったと思しき場所には、国旗掲揚柱が建っていた。植え込みに入って大理石の石柱を見たら「皇太子殿下御降誕記念 洲崎三業組合 深川区公会第十一班」と刻まれていた。

大門通りを挟むように縦横 100mほどの碁盤の目のように区画された町並みが、東西に四区画・南北に四区画、合計十六区画整然と並んでいる。

国土地理院の地形図で確認すると埋立地の中央部は海拔-0.4m。

碁盤の目を東へ西へ、南へ北へと探索してみたが、往時を偲ぶような建造物はなにひとつなく、都営アパート、民間のマンション、一戸建ての住宅などが並ぶ「住宅地」そのものだった。歴史を物語る遺構や建造物などがひとつぐらい残っていないかと、目を皿のようにして徘徊してみたが、残念ながら収穫はなかった。

なかば諦めかけた時に、東陽一丁目第二公園の敷地内に建つ石碑を発見。

石碑の正面には短歌が刻まれていたが、判読出来なかった。裏へ回ってみたら

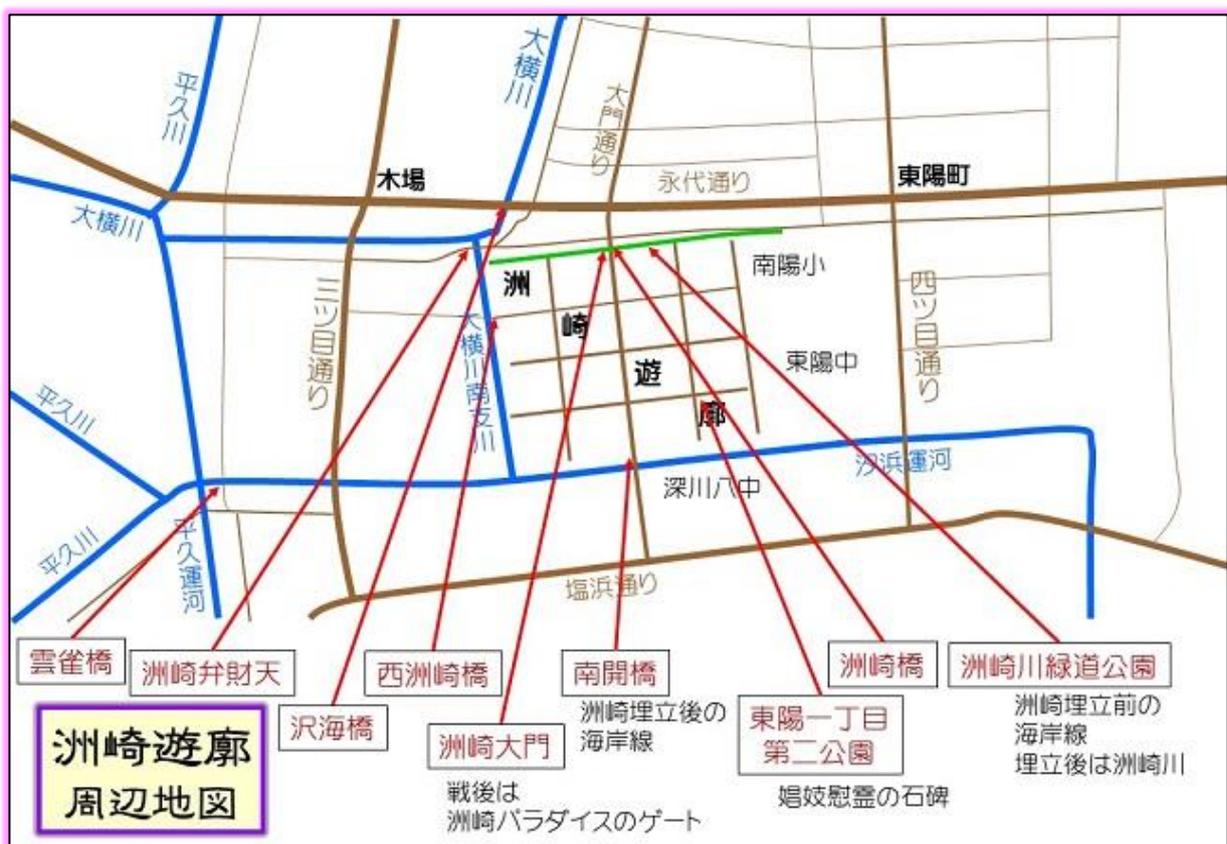
「昭和 6 年 11 月 9 日信州善光寺大本願大宮尼公台下御親修

洲崎遊廓開始以来先亡者追善供養執行記念 洲崎三業組合」と書いてあった。

この区画とその南に建つのは、都営洲崎弁天町アパート一号棟・二号棟・三号棟・四号棟と都営東陽一丁目アパート五号棟。アパートの名前と棟番号が不自然な感じがするが、洲崎弁天町アパート五号棟だけが建て替えられて都営東陽一丁目アパート五号棟と名を変えたのだろうか。辛うじて「洲崎弁天町」という町の名前がここに生き残っていた。

石碑に刻まれていた歌が気になり、帰宅後にインターネットで調べてみたら、「古今東西舎」という web に載っていた。昭和 6 年に善光寺から僧を招いて、遊廓開業以来ここで命を落とした無数の娼妓の霊を慰める法要が行われたと説明があった。

「白菊の花にひまなくおく露は 亡き人しのぶなみだなりけり」



そしてそれから 14 年後、第二次大戦（太平洋戦争）における空襲であとかたもなく消え去った。普通に考えれば、空襲による焼失を機に「ここに遊廓があったという事実」を忘却して、「新しい町を

作る」ということになるような気がするのだが、そうはならなかった。

焼け跡から立ち上がろうとする市民の猛反対に遭うこともなく、僅かな期間の間に「洲崎パラダイス」を作って遊廓を復活させたというのは驚きである。このことも含めて、後の時代に語り継ぐべき「史実」であろう。

碁盤の目の西端を北に向かい、大門跡から永代通りに戻った。永代通りを西へ、木場に向かって歩く。沢海橋（さわうみばし）を渡り木場六丁目に入ると、左手の大横川と支川の合流点に洲崎神社（洲崎弁財天）の佇まいがうかがえる。

徳川五代将軍の綱吉の実母である桂昌院が、城内の紅葉山に祀ってあった守り本尊の弁財天を、元禄13年（1700年）にこの地に遷座したのが洲崎神社の興りと言われている。折りあたかも洲崎の埋立が行われている頃にあたる。元禄11年には江戸の大火があり、本所深川は炎に襲われたし、その後も何度となく火事と水害にも見舞われたこの地で、江戸の海を目の前にした所に弁財天を遷座したのには、相応の理由があったものと推察する。

<3> おみくじ煎餅の思い出

洲崎の歴史を辿る話が佳境に達したところで、突然話題が変わることになるが……。

旅館に泊ると宿帳を書いた後でお茶をいただきながらお茶菓子の器に入った干菓子をいただくことがあった。干菓子はひとつずつ小さな紙で包まれており、その紙をほどいて広げると、おみくじの託宣のような一句や短文が書いてあり、読みながら一喜一憂したものだ。中には干菓子の中に入れられている凝ったものもあり、辻占（つじうら）と言われていたらしいが、名前までは知らなかった。

辻占という言葉は万葉の時代に遡るもので、黄楊（つげ）の櫛を持って路上で念仏を唱え、通りかかった人の言葉を聞いて「物事の吉凶を占う」という占いのひとつだった。これが後に形を変えて、干菓子の中に練り込んだおみくじのようにメッセージを書いた紙になったり、干菓子をくるむ紙に「吉凶を表す短文」がしたためられていたりという形になっていったと言われている。

昭和40～50年代には、割烹やスナックなどで付き出しとして出す干菓子にも使われていたが、近頃はあまり遭遇することはなくなった。「おみくじ煎餅」などと言った記憶がある。

<4> 落語 「辰巳の辻占（たつみのつじうら）」

上方落語に「辻占茶屋（つじうらちゃや）」という噺がある。この噺が明治時代に東京に移植されて「辰巳の辻占」という落語になったと言われている。

「辻占茶屋」の原話は、初代露の五郎兵衛作の「心中の大笨者」という滑稽噺で、舞台は難波新地のお茶屋になっている。

初代露の五郎兵衛は、寛永年間に京都生まれの落語家。日蓮宗の僧侶から還俗して辻咄に入り、上方落語の祖と言われたが、晩年剃髪して露休と名乗った。「辻占茶屋」の原話は、「露休置土産」という文献に残された。

一方「辰巳の辻占」では舞台は洲崎の遊廓となっているが、洲崎に遊廓が出来たのは明治21年なので、東京落語「辰巳の辻占」の誕生は明治中期以降と考えられる

筋書きを全部書いてしまったら、面白くなくなってしまうので、詳述はせず、あらましかけにする。

洲崎の女に入れあげて遊廓通いを続けている男、「女が本気なら身請けの世話をしてやるから確かめてこい」と伯父さんに言われる。

女の気持ちを確かめるのにはこれしか方法がないと、伯父さんから勧められた手はずで女を呼び出す。茶屋で女が来るのを待つ間に辻占の巻煎餅を手にするのだが、いくら引いても碌な言葉が出て来ないばかりか、前途を危ぶむような言葉ばかりが出てくる。

そして、意を決して計画通りの行動に取りかかるのだが……。

思わぬ結果となってしまい、サゲ（落ち）に入る。

以上